

国立国語研究所学術情報リポジトリ
国語研の窓 第10号 (2002年1月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001951

国語研の窓

10号

平成14年1月1日 第10号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution :The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所広報委員会
〒115-8620東京都北区西が丘3-9-14
電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530
URL <http://www.kokken.go.jp/>



暮らしに
生きる
ことば

「初詣」

お正月の行事として定着している初詣。意外なことに古い歳時記には「初詣」という語は見られません。俳句の題目としては「恵方(えほう)詣」（その年の恵方に当たる社寺に参拝する行事）のほうが一般的であったようです。調べたかぎりでは、「初詣」が歳時記に登場しあじめるのは明治時代のようです。明治41年の『俳諧例句新撰歳時記』に「大人びて着こなしも言ひき初詣（小野白雲樓）」という句が紹介されているのを見つけました。

ところで、この「初詣」を昔の仮名遣い（表記方法）で書くとどのようになるでしょうか。答えは「はつまうで」です。

「はつまうで」のような仮名文字の使い方を「歴史的仮名遣い」と呼びます。明治時代には正式な仮名遣いとして公用文や学校教育に用いられました。

もともと、仮名文字は実際の発音を写したもの（表

音表記）でした。「歴史的仮名遣い」は平安時代の仮名遣いに基づくものですから、平安時代の発音を反映したものだったのです。

たとえば、「はつまうで」の「まうで」も、最初は「マウデ」という発音であったはずです。【マウデ】は[mau]のように母音が連続する発音（連母音）を含んでいます。連母音は室町時代末期頃には長くのばす発音（長音）に変化していたといわれています。つまり、【マウデ】は【モーデ】に変化したのです。それでも、仮名遣いは「まうで」のまま残っていたのです。

昭和21年9月、国語審議会は現代の発音に基づいた仮名遣いとして、「現代仮名遣い」を発表しました。以後、公用文・教科書などはこれで表記するようになります。今日では広く普及しています。こうして、「はつまうで」も「はつもうで」と書くようになったのです。

（斎藤達哉）

言語学では音声の構造を研究する領域を音韻論と呼び、音韻論では意味に影響する音の単位を音素と呼びます。「傘kasa」と「肩kata」では/s/と/t/が交替することによって語の意味が変化しますから、/s/と/t/は共に音素です。「雨」と「飴」では子音や母音は同一ですが、アクセントの相違によって意味が変化します。従ってアクセントもまた一種の音素です（アクセントについては本誌9号に相澤正夫氏による解説があります）。

さて、ここで「ナニヤッテンノ」というひとつのテキストを考えましょう。このテキストは聞き手に質問する場合にも使いますが、聞き手を叱責する場合やからかう場合にも使えます。音素もアクセントも文法構造も同じなのに話し手の意図は明らかに異なっている…このように音韻や文法では把握することができない意味のことを言語学では語用論的な意味と呼びます。

語用論的意味には様々な種類があります。「この部屋は暑いですねえ」と言って、聞き手に窓を開けてもらう場合、話し手は＜依頼＞という語用論的意味の伝達を意図しているのですが、ここで伝達が成立するためには広い意味での文脈が必要とされます。聞き手が窓を開けられる位置にいること、話し手が聞き手に行行為を要求できる立場にあること等がその文脈を形成します。従って文脈から切り離された音声そのものを聴取しただけではその発話が上述の語用論的意味を含んでいるかどうかを判断できないことがあります。

一方、文脈の力を借りずに伝達される語用論的意味もあります。上に述べた「ナニヤッテンノ」の例がそれにあたります。文脈を必要としないということは、つまり発話の意図の相違が耳に聞こえる音声の特徴として含まれているということです。

図1に＜質問＞＜叱責＞＜からかい＞という3種の意図で発音された「ナニヤッテンノ」のイントネーションを示しました。イントネーションとはピッチ（声の高さ）の時間変化曲線のことで、図では横軸が時間、縦軸がピッチです。三者のイントネーションは明瞭に相違していますが、この相違は従来の音韻論では考察の対象から除外されてきています。

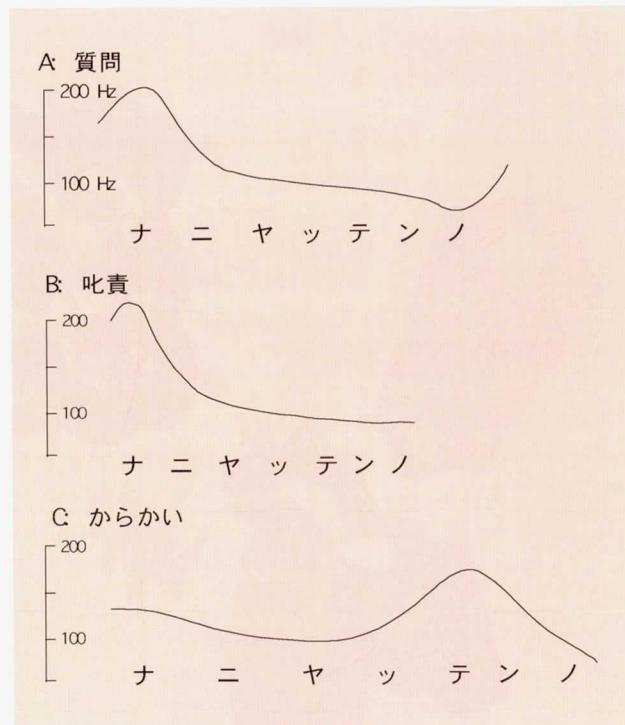


図1 3種類の「ナニヤッテンノ」のイントネーション
参考文献[1]から引用。

私の研究グループでは「ソーデスカ」などのテキストを＜質問＞＜強調の質問＞＜落胆＞＜感心＞＜疑い＞＜無関心＞という6種類の語用論的意味で発音した音声を用いて、話者の意図をどの程度正確に聞きとることができるかを調べたことがあります。実験の結果、平均で80%、＜疑い＞や＜感心＞についてはほぼ100%の正解率が得られました。

このような、音声だけによって伝達可能な語用論的意味を「パラ言語的意味」と呼ぶことにしましょう（「パラ」は「～の近所に」という意味を表す接頭辞であり、paralanguageは「周辺言語」と訳されることがあります）。

パラ言語的意味の伝達には音声のどのような特徴が関係しているでしょうか。図2は上記の実験に利用した音声のひとつ「ソーデスカ」のイントネーションです。図中の縦線は音節の境界、つまり「そ | う | で | す | か」の切れ目を示しています。

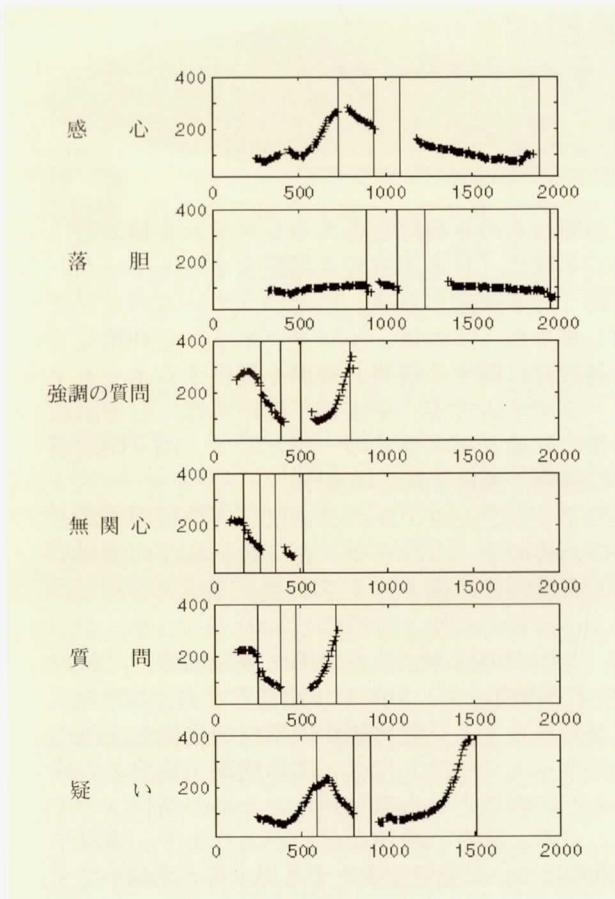


図2 6種類のパラ言語的意味で発音された「そうですか」のイントネーション。

この図からはいろいろな情報が読みとれます。まず発音に要する時間が大幅に変動しており、<感心><落胆><疑い>は、<質問><強調の質問><無関心>に比べてずっと長くなっています。また発話全体が一様に長くなるのではなく、冒頭と末尾の音節（「そう」と「か」）が著しくのびていることもわかります。

次に声の高さに注目します。まず最も目につくのは発話末尾の高さでしょう。<質問><強調の質問><疑い>ではピッチが上昇しており他では下降しています。一般に聴き手から何らかの情報を引き出そうとする発話の末尾に上昇が生じることはよく知られていますが、「質問」と「疑い」とでは上昇の形が異なっています。前者では音節「か」の内部でほぼ直線的にピッチが上昇しているのに対して、後者では音節の前半では低いピッチが持続し、その後に上昇が始まっています。

発話冒頭でもピッチは顕著に変動していますが、ここではアクセントとの関係が重要です。「そう」という語のアクセントは頭高型です。つまりピッチがいきなり高く始まりすぐに下降するタイプのアクセントです。

実際図2でも「質問」「強調の質問」「無関心」ではそのとおりの形を示しています。しかし「感心」と「疑い」の冒頭のピッチは非常に低く、一定時間低い状態を維持した後に急激に上昇しています。持続時間とピッチの特徴がパラ言語的な意味の伝達に大きく寄与していることは知覚実験によって確認できます。またイントネーションと持続時間だけでなく、母音の音質や声帯振動の様式などもパラ言語的な意味によって組織的に変化することがわかっています。興味のある方は参考文献[2]をご覧ください（ただし専門的な論文であることをお断りしておきます）。

以上のようにパラ言語的意味に関する音声特徴についてはある程度研究を進めることができました。この種の実験的研究は今後も継続する必要がありますが、今後はそれと並行して種々の音声特徴の組み合わせとパラ言語的意味との対応関係を明らかにする必要があります。つまりパラ言語的意味を基準とした音韻論の構築ですが、これには難しい問題が山積しています。

何よりも重要なのは種々の音声特徴とテキストの文法的意味との間の相互作用の問題でしょう。あるひとつのテキストに対してXというパラ言語的意味をもたらす音声特徴の組み合わせがあらゆるテキストに対して同じXをもたらすならば相互作用は存在しないことになりますが、実際はそうではなさそうです。例えば「ソーデスカ」の終助詞「カ」を「ネ」に替えたテキストを図2の「疑い」の調子で発音しても、それは「疑い」とは知覚されないでしょう。

相互作用の問題を正しく理解するためには、パラ言語的意味に組織的な分類を施す必要がありますが、これはそれだけでひとつの大仕事です。

パラ言語的意味は、従来の言語研究では真剣に考察されたことがありません。しかし、日常の言語生活においてパラ言語的意味が重要な役割を果たしていることは明らかです。この失われた意味と音声との関係を解明することができれば音声コミュニケーションのメカニズムに対する理解を深めることができ、ひいては朗読や演劇の指導、もしくはコンピュータによる合成音声の品質向上などへ応用する可能性も拓けてくると思われます。

参考文献

[1]前川「パラ言語的情報」『別冊国文学』No.53,pp.172-175,学燈社,2000.

[2]前川・北川「パラ言語的情報の生成と知覚」電子情報通信学会技術報告(SP99-10),pp.9-16,1999.

（前川喜久雄）

ことば・社会・世界
日本語教育支援総合ネットワーク
「日本語道しるべ」

世界中でたくさんの人たちが日本語を学習しています。日本語を教えている人も国内外を問わずたくさんいます（国際交流基金日本語国際センターの平成10年度調査では海外の日本語学習者数200万人強、教師数3万人弱）。

国内外の日本語を教える現場では、「生きた日本語を学習できるもの」「日本人の言語生活が描かれたもの」「現在の日本についての情報」などが求められています。また、学習者のレベルに応じて漢字の量を変えるなどの加工が自由にできる素材やその教育的効果などについて、情報交換ができる場も求められています。

そこで、文化庁では、日本語教育に関する情報や資料の集積と流通を促し、簡単な手続きで日本語教

育に必要なものを利用し合えるシステムを検討し、平成12年度に「日本語教育支援総合ネットワーク」（通称「日本語道しるべ」）というホームページを開設しました。これは、インターネットを利用して日本語教育に関する情報と資料を提供するネットワーク・システムです。平成13年度からは、日本語教育情報の収集と提供事業の一環として、国立国語研究所に移管、運営されています。

このネットワーク・システムは、「情報の収集と提供のためのネットワーク」と「教材制作の素材の提供と交流のためのネットワーク」で構成されています。「情報の収集と提供のためのネットワーク」には、「国内の日本語教育機関・施設情報」「統計情報、行事情報」「(社)日本語教育学会会員情報」などがあります。「教材制作の素材の提供と交流のためのネットワーク」には、関係機関・施設との連携のもとに収集された教材制作のための素材（テキスト、音声、写真、映像など）があります。素材やその活用について意見交換をする掲示板も準備中です。

このネットワーク・システムは、日本語教育に携わっている方、日本語教育に興味をお持ちの方はどなたでもご利用になれます。素材の利用など一部のものについては会員登録制を採っております。会員限定のサービスを利用される場合は、ホームページにある会員規約に同意の上、会員登録をしてください。<http://www.kokken.go.jp/nihongo>

本ネットワークが多くの方々に利用され、あわせて多くの方々のご協力により内容が充実していくことを期待しております。 (柳澤好昭)



アンケート結果のお知らせ

本誌8号（2001年7月1日刊）送付先のうち、1734機関（小中高等学校・高専・大学・日本語学校・図書館等）に対して、アンケートへのご協力をお願いしました。そのうち138機関からご回答をいただきました。結果の一部をご紹介します。

○「国語研の窓」の利用状況

- | | |
|---------------|-------|
| 掲示板等で閲覧に供する | 19.6% |
| 図書館等で閲覧に供する | 37.7% |
| 担当係等で閲覧に供する | 34.8% |
| 保管するが閲覧には供しない | 8.7% |

○「国語研の窓」を読んだ感想

- | | |
|--------|-------|
| おもしろい | 49.3% |
| わかりやすい | 43.5% |

役に立つ情報がある	78.3%
つまらない	1.4%
むずかしい	2.2%
ほとんど役に立たない	5.1%

○これまでの記事のうち、特に興味を持ったり、参考になったりしたもの

- | | |
|------------|--------|
| ことばQ&A | 19件 |
| 暮らしに生きることば | 17件 |
| 解説 | 13件 など |

好意的に読んでくださっていることがわかり、大変励みになりました。また、自由に書いていただいたご意見も、今後の編集のために非常に参考になりました。ご協力ありがとうございました。(編集部)

ことばQ&A

Q

質問：外来語には、「ストップウォッチ／ストップウォッチ」のように、どちらの書き方をしたらよいか迷うものがあります。外来語の片仮名での書き表し方には、何か決まりがあるのですか。

A

回答：外国の地名・人名を含めて、外来語を片仮名で表記するときのよりどころとしては、平成3年6月に公にされた、内閣告示・訓令「外来語の表記」があります。現在、法令、公用文、マスコミ、学校教育などでは、これが一定の目安とされています。ただしその「前書き」には、いろいろな専門分野や個人、過去に行われた表記をしばるものではないということが記されています。「外来語の表記」の全文は、国語研究会監修『[第6次改訂] 現行の国語表記の基準』(ぎょうせい)などで見ることができます。

外国語が外来語として日本語に取り入れられる時、日本語にない発音には、基本的に、日本語の中のなるべく近い音があてられます。例えば英語の“Thank you.”の“tha”的音は[θæ]ですが、この音は共通語の典型的な発音にはないため、聞こえの近い「サ」の音があてられ、「サンキュー」となります。

しかし場合によっては、元の外国語の発音の特徴をなるべく残すように、日本語で從来使われていなかった発音を、新たに使うようになることもあります。

このような音を「外来音」と言います。質問の「ストップウォッチ」の「ウォ」の音はそのような例です。ほかに、「フォーク」の「フォ」、「ディズニーランド」の「ディ」なども、意外な感じを持たれるかもしれません、外来音です。新しい音を書き表すわけですから、表記の面でも、従来にない組み合わせで片仮名が用いられることになります。「ウォ、フォ、ディ」などはそのような表記です。

内閣告示「外来語の表記」では、外来音を表す仮名について、「シェ、ジェ、ヂエ、ツア、ツエ、ツオ、ティ、ディ、ファ、フィ、フェ、フォ、デュ」の13を「外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名」とし、「イエ、ウイ、ウェ、ウォ、クア、クイ、クエ、クオ、ツイ、トゥ、グア、ドゥ、ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴエ、ヴオ、テュ、フュ、ヴュ」の20を「原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名」としています。これに基づけば、質問の「ストップウォッチ／ストップウォッチ」については、原語に近く書き表したい時には「ストップウォッチ」、そうでなければ「ストップウォッチ」と書く、ということになるでしょう。

参考：新「ことば」シリーズ6『言葉に関する問答集－外来語編－』、同8『同一外来語編(2)－』（財務省印刷局）
(三井はるみ)

新刊書目

○『日本語科学10』

国立国語研究所編／2001年10月／国書刊行会／A4判／3680円（税別）

○『国語年鑑2001年版』

国立国語研究所編／2001年12月／大日本図書／A5判／7600円（税別）

開催記録

○国立国語研究所 第9回 国際シンポジウム

第1部会「多言語・多文化共生社会における言語問題」

2001年10月22日（月）国立国語研究所

第2部会「日本語教師教育と指導者」（非公開）

2001年12月8日（土）国立国語研究所

○平成13年度国立国語研究所日本語教育短期研修

「対照研究と日本語教育」

2001年11月24日（土）神戸大学

2001年12月1日（土）国立国語研究所

○平成13年度国立国語研究所公開研究発表会

「言語データベース—さまざまな視点からの構築—」

2001年12月20日（木）国立国語研究所

開催案内

○平成13年度国立国語研究所日本語教育短期研修

「コンピュータと作文添削」

日時：2002年1月12日（土）

場所：国立国語研究所

「日本語学習における社会・心理的側面の研究方法」

日時：2002年3月9日（土）

場所：国立国語研究所

問い合わせ先：研修事務室：tel 03-5993-7667

「ことば」を調べる・考える

小林隆（東北大学大学院助教授）／田中牧郎・小河原義朗（国立国語研究所）

2001年10月27日(土) 午後2時～4時 艮陵(ごんりょう)会館(宮城県仙台市)

国立国語研究所 主催

仙台市教育委員会・NHK仙台放送局・仙台放送・TBC東北放送・東日本放送・ミヤギテレビ 後援

今までに5回を重ねたことばフォーラムですが、国語研究所の講堂から出かけての開催は、はじめてのことでした。当日は、約90名の参加者にお集まりいただきました。「『ことば』を調べる・考える」と題し、先に刊行した「新『ことば』シリーズ14・言葉に関する問答集—よくある『ことば』の質問—」（国立国語研究所編・財務省印刷局発行）に関連し、三つの話題で講演し、質問を受けました。

■ 現代に生きる方言

小林 隆

地元宮城県の方言を材料に、

①現在、方言の消滅は急速に進んでいる。

例：ニドイモ〔ジャガイモ〕・オレサマ〔カミナリ(雷)〕

②そのなかで生き残る方言もある。

例：こわい〔疲れた〕・おしょすい〔恥ずかしい〕

③そればかりか、新たに生まれる方言もみつかる。

例：ジャス〔ジャージ〕・いきなり〔非常に・とても〕の、三つの話題を展開しました。ときには実際の方言調査の結果に基づき、また特に「ジャス」については、当日進行をお手伝いいただいたミヤギテレビアナウンサー部の吾妻秀謙氏の参加で、会場の参加者へのインタビューも交え、和やかに進行しました。

■ 漢字表との付き合い方

田中 牧郎

幕末以来の漢字使用や漢字表の歴史を踏まえ、

①現在行なわれている「教育漢字」「常用漢字」



- 「人名用漢字」「表外漢字字体表」「JIS漢字」とは、それぞれどういう性格のものか。
②国語研究所が調査している漢字使用の実態調査の結果にはどんなものがあるのか。
③漢字表の抱える問題（例：かな書き・交ぜ書き・ふりがなの問題）をどう考えればよいか。などについて解説がありました。

■ 日本語教育から見た日本語 小河原 義朗

日本人のための日本語という視点ばかりではなく、国際コミュニケーションの手段としての日本語という視点の重要性を示しました。具体的なデータを示しながら、次の三点を問題にしました。

- ①日本語教育と国語教育とはどう違うのか。
②日本語学習者は、どこでどう増えているのか。
③その日本語学習者のニーズとはどんなものか。

質問コーナー

方言の語源に関する質問、新聞やニュース報道で使われる漢字表記と常用漢字のかかわりに関する質問、日本語を勉強する人にとって、ひらがな・カタカナ・漢字・ローマ字といつといろいろな表記方法はどう受けとめられているか、といった質問がとりあげられ、講演者が回答しました。そのほかにも、辞書の利用や、語源の調べ方・考え方についての質問をとりあげ、解説しました。

(山田貞雄)

日本語情報の海外提供

横山詔一・笹原宏之・熊谷康雄・エリク＝ロング（国立国語研究所）

2001年11月1日（木）午後4時10分～55分、東京国際フォーラム（東京都千代田区）

データベース2001東京、プレゼンテーションセミナー

国立国語研究所・紀伊國屋書店共催、日本書籍出版協会 後援

海外のWWWブラウザに日本語を表示させようとすると、いろいろな点で難しい問題に直面します。この壁を突き崩すには、どうすればよいのでしょうか。現在いくつかの方法が提案されていますが、国立国語研究所が中心になって開発を進めている日本語情報の海外提供システムは、日本語の一つ一つの文字を画像で画面に素早く表示できるように工夫しています。今回のセミナーは、その実例を二つ紹介しました。

■実例その1：出版情報データベースの提供

たとえば、本のタイトル（書名）などを英訳すると、本来のニュアンスはどうしても伝わりにくくなります。海外へ我が国の出版情報を提供する場合、少なくとも書名や著者名は日本語で表示されるのが望ましいと考えられます。ここでは、我が国の出版情報データベースを、海外からも「日本語で高速に」検索できるシステムのデモンストレーションと解説を行いました。

このシステムを利用して海外に提供するデータベースは、（社）日本書籍出版協会が構築している出版情報データベース「Books」です。そこには、現在入手可能な書籍約60万件の書誌情報が収められています。

■実例その2：用語用字データベースの提供

国立国語研究所は、1956年（昭和31年）当時に出版された代表的な一般雑誌90種類から約100万字を抽出し、どのような文字や語が、どのくらい使われているのかを調査しました。この雑誌90種類の電子化データを海外からも検索できるようにしたシステムが、今春から国立国語研究所のWebページで公開されています。



このシステムについて、昨年の「データベース2000東京」で開催されたセミナーにおいて紹介した内容も含めて、文字表記の問題を中心に解説とデモンストレーションを実施しました。

■その他

以上の実例にくわえて、国立国語研究所が作成してきた「日本語研究の文献目録」や日本語教育の教材作りに利用できる「素材データベース」（日本語教育支援総合ネットワークシステム）など、インターネットで公開されているデータベースの内容についても簡単に紹介しました。

■参加者の満足度

参加者は、図書館、日本語教育、出版社、新聞社、IT関連企業、流通運輸関連企業などの関係者が多く、さまざまな幅広い分野の方々から興味・関心を寄せていただいたことが分かります。セミナーの満足度をアンケートでたずねたところ、肯定的に評価してくださった回答が89%でした。

（横山詔一）

ことばフォーラムのご案内

国立国語研究所では、市民のみなさんと一緒にことばについて考えたり、話し合ったりできる「広場」のような機会を、「ことばフォーラム」と名付けて開催しています。

第8回ことばフォーラム：ネット・コミュニケーションと「ことば」

・開催日：

2002年1月19日(土)午後2時～4時

・開催場所：

立川市女性総合センター1階
アイムホール(東京都立川市曙町2-36-2)
会場連絡先 電話 042-528-6801)

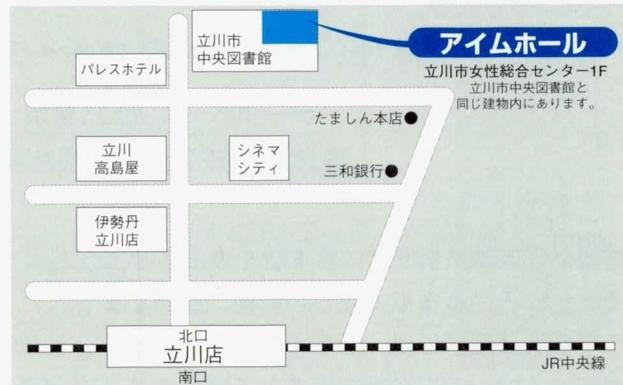
・概要：

ここ4、5年の間に電子メールや携帯電話によるメールが急速に普及し、わたしたちの日常生活に溶け込んできました。この新しい「伝達手段」は家庭や職場でのコミュニケーションにどのような影響を与えるつあるのでしょうか。さまざまな具体例を交えてご紹介します。

メールを使い始めると、いろいろと「作法」に迷う場合が出てきます。例えば、初めての人にいきなりメールを送って失礼にならないだろうか？

メールに「拝啓」「敬具」や時候のあいさつは必要なのか？顔文字や絵文字にはどういう役割があるのか？このような疑問は、メールに対する共通理解がまだ発展途上であることを意味しています。メールにはどのような特徴があり、それを生かすにはどのように利用したらよいのか、「手紙・電話・ファクシミリ」などのこれまでの伝達手段と比較しながら考えてみます。

また、電子メール・携帯メールの発達によって、わたしたちのコミュニケーションの現場はどのように変わってきているのでしょうか。コミュニケーションに対する意識の変化を、最新の研究成果や新聞記事をもとに考えていきます。



便利で豊かな言語生活のために、メールの活用はますます重要になってくるでしょう。現在、電子メール・携帯メールを使っていらっしゃらない方もぜひこの機会にフォーラムに参加して、新しい世界に触れてみてください。

・講演者：

三宅 和子(東洋大学助教授)

池田理恵子(国立国語研究所員)

加藤 安彦(国立国語研究所員)

杉本 明子(国立国語研究所員)

・構成：

山崎 誠(国立国語研究所員)

熊谷 智子(国立国語研究所員)

今回の「ことばフォーラム」は、立川市との共催で開催されます。「ことばフォーラム」は、中学生以上の方を対象としています。どなたでも無料で参加できます。

なお、事前のお申し込みは不要です。(山崎誠)

<予告> 第9回ことばフォーラム「話すことばの豊かさ、再発見」(仮称)

開催日：2002年3月24日(日)午後2時～5時

開催場所：山形県東田川郡三川町 なの花ホール

内容：「中学生とことば」

尾崎 喜光(国立国語研究所)

「方言と共通語」

井上 文子(国立国語研究所)

「方言と授業作り」

茂呂 雄二(筑波大学)

「ことばビデオ『ことば探検・ことば発見』

：総合的な学習のために」

吉岡 泰夫(国立国語研究所)

ことばフォーラムに関する問い合わせ先：国立国語研究所 総務課 tel: 03-5993-7603 E mail: forum@kokken.go.jp

連載案内

○日本語最前線

共同通信社が全国の地方新聞社に配信するコラム記事に、国立国語研究所員6名によるリレー連載「日本語最前線」が始まります。日本語に関する最新の話題を提供していく予定です。掲載の時期は新聞により異なりますが、早ければ1月から始まる予定です。

前号訂正

本誌9号に誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。
(編集部)

「研究室から」(2ページ右下から11行目)
誤 「クアヨウビ」 正 「クワヨービ」